

平曲における「揃物／カタログス」

—— 古代ギリシアの叙事詩との比較から ——

高 橋 秀 樹

— はじめに

楽器を演奏しながら神話や伝説、英雄の事績を謡い語るといふ文化は、古来東西を問わず数多く見受けられる。西洋の最古のものとしては、古代ギリシアにおいてヘーシオドスやホメーロスといった詩人が制作して語ったとされる叙事詩群がそれにあたるし、日本でも琵琶法師などが語り継いできた平曲がある。

しかし、それらが成立した頃の在り方と、現在におけるそれでは様々な点で異なっている。現在、それらの物語は、聴くことによつてより読むことによつて享受されることのほうが一般的である。そして、それらを語ることやそれらを聴くことは、貴重で保存されるべき（絶滅危惧種のような）伝統芸能の営みとして考えられ、復元されるべき無形文化遺産のようなものとして考えられることが多い。また現在、それらはある種のおとぎ話として、あるいは荒唐無稽な想像の産物として、そしてまたあるいは読者の関心を惹くための甚だしい誇張が施された「お話」として了解された上、あくまでも娯楽のために「読む」ものとして扱われることがほとんどである。

二 吟遊詩人という存在

しかし、少なくとも古代ギリシアで叙事詩群が成立した頃には、それらを語る吟遊詩人は、娯楽を提供する芸人としての側面を有していたことに違はないながらも、同時にそして何よりも第一に「賢者」として尊ばれる存在だった。彼らは「かつてあったことも、今あることも、これからあるであろうことも語る」ことができる、常人を超えた知を有する畏るべき人々と考えられていたし、彼らが語ったとされる内容は、現在では考えられないような影響力をもっていた。例えば次のような出来事があった。紀元前七世紀から六世紀にかけて、アテネという都市国家と隣国メガラが、その間にあるサラミスという島の領有をめぐって争っていた。アテネ人のソロンは、サラミス島がアテネに帰属するべきだという根拠として、ホメーロスが語った叙事詩の中で、ギリシアの軍勢が列挙されるくだりで、アテネ人の軍勢の次にサラミス人の軍勢が語られていることを挙げたという。^二このソロンという人物は、常識のない夢見がちな文化人だったわけではない。それどころか、社会的信頼が高く、異例の政治権限を付託されてアテネの抜本的国制改革にあたることになった人物である。つまりこの逸話は、そのような人物ですら、吟遊詩人ホメーロスが語った叙事詩は現実世界の実際的判断において尊ばれるべきものと考えていたということを表している。

彼らの「賢者」としての影響力はかくのごとくだが、では、なぜ、あるいはどのような基準で「賢者」として尊ばれるべきだとされたのか。前述で引用した文言において、現代人のいわば「実用的な」点からすぐに気にかかるのは、「これから在るであろうことも語る」という、予知者めいた行動を想像させる部分であろう。ところが、彼らがどのように「かつてあったこと」を語ったのかということはわかって、どのように「これからあるであろうことも語」ったのかということは、残念ながら詳らかではない。この分野では、むしろ神々か

ら人間に送られた予兆を解釈する占い師や、神殿・聖域で神のお告げを受ける巫女などのほうがすぐに念頭に浮かぶ。あるいは、文字通り予言することではなく、「かつてあったことは今でもあることで、今の世の中にも通用し、そして将来にも存在し通用することであるはずだ」というような社会的通念を表しているのではと考えられないでもないが、はっきりと裏付けられるわけではない。今われわれの手に遺っているものは、彼らが「かつてあったこと」や「今あること」を語った内容が、文字という形に写された残滓と、彼らや彼らの営みをめぐる伝説的逸話だけである。

三 賢者が語るもの

しかしながら、「賢者」としての基準ということについては、興味深い伝説的逸話がある。

古代ギリシアでは、当初から二大叙事詩人としてホメーロスとヘーシオドスの名声が高かった。そして自然と、どちらがより優れているかという関心が高まった。その結果、ホメーロスとヘーシオドスが歌競べで優劣を競うという出来事が起こった、ないし、そのような出来事があったという（架空かもしれない）物語が生まれ、広く普及した^三。その伝説によると、カルキスという町にてパネーデース王の御前で、二人は交互に自慢の詩句を披露しあった。数回やりとりがあった後、聴衆たちはホメーロスに勝利を与えるよう求めたが、王が花冠を授けたのはヘーシオドスだったという。その理由は、戦争や殺戮を述べる者よりも農耕や平和を勧める者のほうが正しいから、というものであった。

これは、ある意味では呆気にとられる裁定である。というのは、これは二人がこれまで制作してきたとされる叙事詩の作風を評した裁定であり、それならばいわず最初から結果は決まっていたわけであって、詩句を披

露して競いあうイベントを行った意味がないからである。逆に言えば、勝負云々に関わらず、ホメーロス作とされる『イーリアス』や『オデュッセイアー』はエンターテイメントとして、それに対してヘーシオドスの諸作はしるべき生活の在り方や倫理を示す典範として考えられ、ヘーシオドスの諸作のほうが尊重されるべきだという世評があつたということであろう。

しかし、ヘーシオドスがまったく戦争や殺戮を述べていないかといえば、そうではない。『神統記』は神々同士の戦いが満載されている。また、戦争や殺戮というわけではないにせよ、『労働と日』では個々人の競い合いが奨励されている面もある。牧歌的な穏やかな平和が全編を貫いているわけではない。

では、二人の名が冠されている作品のより大きな違いとして何があるかというところ、その形式が挙げられる。ホメーロス作とされる叙事詩は、事件を時の流れに沿って描写していくことが基本になっている。もちろん、『オデュッセイアー』はかなり凝ったつくりになっていて、別の場所で別の人物を軸として進む事件が描写されるときには、少し時間が巻戻った時点から話が進んでいくところがあるし、登場人物が長い回顧談をする場面では、数年前の出来事が語られることになる。しかし、回顧談の中では事件が起こった順に語られていくし、また作品全体を大きく見れば、漂流中のオデュッセウスが無事に故郷にたどり着いて狼藉者を退治し、本来の地位を取り戻す、という出来事が時の流れに沿って語られている。

それに対して、ヘーシオドスの作品は、物事事項の列挙形式（カタログ形式、カタログス）が基本である。『神統記』は、世界の始まりから現在の世の中に至るまでを語っていると言う意味では、時系列的な物語であるかもしれないが、具体的には神々とそれぞれの神にまつわる神話が列挙されるものとなっている。次々に現れる諸神話は、必ずしも時間的に途切れなく連続する出来事ないし事件として語られているわけではなく、それぞれ独立した物語となっている。また『労働と日』では、作品が生まれたきっかけとなる事件が語られており、

作品の重要な動機モティフとなつてゐるものの、あくまでも作品で描こうとする内容への導入である。他の部分、つまり本体部分については、思想的連続性や一貫性はありつつも、語られる個々の内容は、それぞれ独立した訓話の列挙であり、日々の生活のルールの列挙であり、陥りやすい間違ひに対する警告や戒めの列挙である。

となると、ヘーシオドスの作品が最も尊重されるべきという世評は、忘れてはならない大切な事項を列挙しながら語り聴かせるという営みを、高く評価しようとする気持ちと核心とするものであろう。^四しかしそれは当然のことながら説教臭く煙たいものとなるから、むしろ娯楽として人気が高まるのは、戦士の勲や手に汗握る冒険を繰り出していく語りのほうとなり、パネーデース王以外的一般聴衆は、ホメーロスの作品に喝采を送つたという伝説となるのであろう。

だが、ホメーロス作とされる叙事詩にまったくカタログ形式の語りがないかというところではない。それは、より古い時代の成立と考えられる『イーリアス』のほうによく見て取られる。第一書では、トロイエー人と戦争中のギリシア人の内部で仲間割れが生じた経緯が語られるが、その後の第二書において、戦闘場面の描写に入る前に、ギリシア人の軍勢のその武將と配下が、延々と列挙されていく。^五次いで、トロイエー人の武將と配下が延々と列挙されて語られる。^六その上で、いよいよ豪華華麗な戦絵巻が繰りひろげられていくことになる。また、第三書では、スタティックな勢揃いの様子とは異なる、戦闘中のダイナミックな様子について、プリアモス王とヘレネーの一问一答式対話の形で、ギリシア人の主だった武將の様子が列挙されていく。^七そしてまた第八書ではギリシア人に討たれていくトロイエー人の列挙、第一二書では河川名の列挙、さらに第一六書ではギリシア人の英雄アキレウスが率いる武將たちの名の列挙、等。

つまり、エンターテインメント性を最大限に押し出したホメーロスの作風においても、カタログ形式の語りが完全に無くなることはなかったのである。むしろ、『イーリアス』で描かれる戦争がどれほど大規模なものだっ

たかを表現するためには、延々と陣容の内容を述べていくことは効果的だったろうし、自然なことだったろう。つまり、カタログ形式の語りをどのように効果的に用いるかということが、古代ギリシアの叙事詩において、語りの文化の重要なポイントだったのである。

このことは、本稿の冒頭で述べたような、エンターテイメントとして古典を楽しむ現代人の「読者」の感覚と、作品成立時の「聴衆」の感覚とがずれる事柄の一つかもしれない。紙の上で延々と固有名詞が列挙されていく字面を目で追っていくことにいささか辟易するのが、少なからぬ現代の「読者」の感覚ではなかるうか。

四 「語り物」の中にある「揃物／カタログス」

さてこのようならず、おそらく古代ギリシアの叙事詩に限ったことではない。つまり、「語り」の文化の中で、重要と考えられる事柄が延々と列挙されていく様式が存在し、徐々に細い流れになりつつも大切に継承され現在に至っているが、現代の「読者」にとってはいささか退屈で、その意義や作品の中で有する意味にあまり注目が集まらない、という現象である。

日本の『平家物語』についてまさにこの現象について述べている先行研究がある。少し長くなるが次に引用してみる。¹⁾

「次に軍記物の中で比較的散文に近い部分を探つて見ても、その韻律は所謂散文と異なつてゐる。凡そ心のはたらきといふか呼吸といふか、さうしたものに自らなる律動がある以上、之を表現する文にも亦必ず何等かの韻律がある筈であつて、随つて所謂散文律は古来の諸種の散文にもそれぞれ存した理であるが、軍記物

の韻律は之に比べてもう少し強くはつきりしたものである。例へば、所謂勢揃（或は勢汰）の説話にしても、そこには、大將軍以下宗徒の面々が、殆ど一人の遺漏もなく、其姓名を羅列してゐるのが常である。平家物語巻九、三草勢揃（山田孝雄氏寶文館本、三五〇頁）の條は、殆ど典型的に勢揃説話であるが、ここには、大手の大將軍には蒲御曹司範頼以下相伴ふ人々として、二十九名、搦手の大將軍には九郎御曹司義經以下、同じく伴ふ人々として、三十六名の姓名が列んでゐる。今日活字で之を読む人々が果して、小口から是等の姓名を読んで行くかどうか、読むとしても、単に一通り目を通すといふ以上にどれだけの興味を感じるかは疑問であるが、稿者は、曾て琵琶によつてかうした姓名の羅列を聴いて、そこに単調退屈な調子の中に、一種の効果が有り、決して無意味ではない事を知つたので、爾來かういふ部分を閲読する場合にも行や頁を飛ばすやうな事はせず、他の部分と同様の態度で読む事にしてゐる。さうした稿者の経験によれば、かういふ風に、無造作に人名を羅列した部分でも、殊に冒頭に「進む面々誰々ぞ」とか、結末に「都合その勢何万騎云々其の山に陣をとる」などと首尾を整へてゐる場合には、所謂散文律以上にはつきりした（といつても韻文律では固より無い）或韻律を耳にする。」

『平家物語』、いやむしろ語られるものとしての平曲において、固有名詞が延々と列挙されるくだけは「揃物」と呼ばれ、五か所ある。巻第三の「公卿揃」、巻第四の「源氏揃」及び「大衆揃」、巻第五の「朝敵揃」そして巻第九の「勢揃」である。公卿ないし将兵たちの固有名詞が長々と連ねられているのだが、譜本によつて語りの調子を確認していくなら、固有名詞が列挙される肝の部分になると、曲調を決める節譜は、いずれの「揃物」でも「拾」になっており、その昂揚した声音で描かれていく勇壮あるいは華麗なパレードを、いわば耳で、見ることになるのがわかる。

さてしかし、耳触りの心地よさや昂揚感はそれ自体価値があるものだとしても、そのような聴きどころがどのような意図で「揃物」になっているのか、あるいはまた換言すれば、聴きどころである「揃物」がなぜ平曲の、そのそれぞれの位置にあるのか。これは少し立ち止まって考えてみてよいのではないか。

この疑問の在り処をもう少し詳しく述べてみよう。後世にわたって忘れ去られるべきではないと考えられた大合戦の記憶が、物語として整えられ口承されていくのは自然なことである。その際に、双方の陣容について詳しく物語ろうとするのも自然である。しかしその単純で素朴な形としては、戦に至る経緯が示された後、それぞれの陣容が示され、そして具体的な戦闘描写に進む、というのが無理のないところではないか。先に述べた古代ギリシアの叙事詩『イーリアス』がまさにそのような構成になっている。

ところが、『平家物語』ないし平曲ではそうはなっていない。十二巻のあちらこちらに「揃物」が撒かれている。もちろん、たちどころにいくつかの理由は思いつく。物語全体が非常に長いから、最初にそれぞれの陣容を描写しても、とても物語の最後に至るまで覚えていられない。あるいは、平家の最盛期からその凋落に至る長いタイムスパンの諸事が語られており、大小取り混ぜて様々な合戦が描かれるから、最初の方で二大陣営のそれぞれを詳細に羅列することにはあまり意味がなく、それぞれの合戦のところで述べるほうが適切である、等。

だが、それらの説明は十分とは言えない。『イーリアス』も同じように長大な作品だが、双方の陣容について最初のほうでまとめて描かれている（二四書あるなかでの第二書）。また、『イーリアス』の本筋はわずか数十日間の出来事を描いているにすぎない中で、随所に挿話的に、あるいは暗示的に十年間にわたるトロイア戦争の諸場面が織り込まれているが、それでも二大陣営の「揃物」が第二書に現れる。また、個々の合戦ごとに焦点を当てて将兵を列挙しようというなら、それぞれの合戦描写の際にその双方の陣容について釣り合いのとれ

た「揃物」があつて然るべきだろうに、上記のどの「揃物」も一方の側の人々しか描かれぬ。

深い意味はないと考えてもよいかもしれない。しかし、読み物ならぬ語り物として向き合う時、昂揚する勇壮な場面が意味なく配置されていると考えるのは、いかにも落ち着かない。深読み（深聴き）は承知の上で、敢えて少し考えてみたい。^{二二}

五 「公卿揃」

さて、前述の通り、最初の「揃物」は巻第三に出てくる「公卿揃」である。これは戦闘に先立って軍勢が揃う猛々しい場面ではなく、時の権力の座にあつた関白、諸大臣、諸大将、栄華を極めている公卿たちが並ぶ華麗な場面である。

歴々が集まったのは、後に八十一代天皇となる皇子が生まれたお祝いのためであり、向かった先は六波羅であつた。『平家物語』はその冒頭から平氏の台頭を描き、それは清盛の代で頂点に達するが、その地位を確実にしたのがこの皇子である。清盛は娘徳子を第八十代高倉天皇に嫁がせ、皇子の誕生を熱望していた。皇子が生まれれば清盛は外祖父として圧倒的な権限を振るうことができる。しかし、奇怪な予兆もあり、難産でもあり、種々の点で異例な事態の中での出産だつた。無事に生まれたとき、清盛は喜び泣きして、法皇には人々が眉を擧めるほどの莫大な財を贈つた。

このお祝いにすかさず六波羅に参上した三十三人が「拾」の節で列挙されていく。既に述べたように、戦闘場面ではないので、武装した人々が並ぶ場面ではないが、脈絡から容易にわかるように、心からあれ表面的にはあれ平氏に味方し、その時点では栄華の地位にあり、平氏からの恩恵や保護を逃すまいとしている人々

の描写であり、平氏勢力の概要が示されていると言えよう。

六 「源氏揃」

次に語られる「揃物」は、同じく巻第四に出てくる「源氏揃」である。

皇子の誕生後、できるだけ早く帝にしようとする清盛の動きが加速していく。後白河法皇は鳥羽殿に軟禁され、高倉天皇は退位させられる。清盛は、世間の声に構わず、未だ三歳の皇子を即位させるべく準備を進める。そして遂に皇子が即位して安徳天皇となり、清盛はじめ平氏の地位は絶対揺るがぬものになったかに見えた。だが、後白河法皇の皇子で、英才の誉れ高く次の帝として期待されていたながら、平氏の妨害にあつて皇位継承の可能性を奪われていた以仁王の許に、源頼政が密かに訪れ、平氏追討の令旨を出して挙兵するよう勧める。その際に頼政は、挙兵すれば誰が味方するか延々と述べ並べる。かくして以仁王は平氏追討の決断を下し、合戦へと進んでいくことになる。

この部分も脈絡から明らかなように、源氏勢力の概要が示された「揃物」と言える。しかし、「公卿揃」と異なるのは、戦闘直前、戦闘に向かうと期待される者たちの列挙になっていることである。その意味では、戦闘開始の前に行われる閲兵にも似て、軍記物の中での「揃物」に相応しい。しかし、語りが進んでいくとわかるように、この決起は計画していた軍勢が揃わないうちに戦闘に突入することになり、ここで列挙された者たちのほんの一部しかこの直後に起こった戦闘には加わらなかった。にもかかわらず五十余名がわざわざ列挙されるのは何故なのか。このことは後に取り上げる。

七 「大衆揃」

源頼政の立てた計画は三大僧兵集団を味方につけて当面の戦局を支え、全国各地から味方が集まるのを待つというものだった。以仁王は密かに三井寺に移って拠点を構える。だが、延暦寺の僧兵たちからは助力を断られ、興福寺からは連絡が来ない。所期の展開に至らないまま、既に決起が平氏側に露見してしまったため、六波羅への夜襲へと計画を変更する。三井寺の僧兵たちは去就を決断しなければならなくなり、議論は長時間にわたって夜襲の好機を逃してしまいそうになるが、遂に六波羅を攻撃することを決断する。その時の軍勢の内容が語られるのが「大衆揃」、つまり僧兵たちの揃である。五十弱の固有名詞が列挙される。これらの者たちが急ぎ六波羅に向かうが夜が空けてしまいそうになり、またも計画を変更して宇治に向かう。既に平氏は平知盛の指揮の下、追いつがってきており、「両軍遭遇して「橋合戦」の場面となる。ここでは数々の目覚ましい武勲が挙げられ、僧兵たちの奮闘が小気味よく描かれる。

戦闘に意気込む者たちが列挙された上で華々しい戦闘場面に至るといって、おそらく軍記物の中の「揃物」として、極めて自然で、聴き手の気持ち盛り上げ惹きつけて導いていく典型的な事例であろう。

しかしこの戦闘で、以仁王を戴く源頼政は結局敗北し、戦死してしまい、以仁王も逃走中に討ち取られてしまう。しかし、頼政の首級は家来の機転によって平氏の手には渡らなかった。そして、以仁王の首級についても、平氏方には冷遇されていた以仁王をよく見知っている者がいなかったので、以仁王の女房をしていた女性に首級を見せ、その反応をうかがい、以仁王の首級だということにして、決着をつけた。以仁王、源頼政の挙兵に関わる一連の出来事の終息である。

さて、『平家物語』ではこの挙兵に関する出来事が巻第四全体にわたり、大合戦であったように描かれる。例

えば、「源三位入道、家の子郎党を引き具して、都合その勢三百騎、屋形に火をかけて三井寺に馳せ参る」^{一三}。三井寺の僧兵については「搦手に向かふ老僧共の大将軍には……都合其勢一千人」、また「ひた兜一千余人、三井寺をこそうち立ちけれ」^{一四}。他方平氏は、「都合その勢二万余騎、木幡山をうち越えて、宇治の橋詰に押し寄す」^{一五}。そして「二万余騎うち入れて渡す」^{一六}。

しかし実際には、『玉葉』の記述によれば、頼政の軍と平氏の軍は三百余騎と二万余騎ではなく、五十余騎と三百余騎だったらしい。『山槐記』によれば、宇治川を渡った平氏の軍は二百余騎に過ぎない^{一八}。また、三井寺の兵力も『平家物語』記載の通りとは考え難い^{一九}。さらに『玉葉』によれば、清盛は事件を聞いて五月十日に入洛するが、以仁王逮捕を命じて翌日に福原に帰っている。大事件と判断される事件ではなかったようである^{二〇}。語り物に過度の誇張ないし演出はつきものとは言え、惨敗を喫した小規模な戦いがここまで誇張され、戦闘描写に先立つ見事な「揃物」が付されるのはなぜか、これも後に触れることにしたい。

八 「朝敵揃」

以仁王の事件ののち、清盛は無謀な遷都を執行する。人々は「平家の悪行においては、きはまりぬ」と語り合^{二二}う。それから清盛は悪い夢に苦しめられたり、物の怪を見たりするようになる。また、中納言源雅頼に仕える青侍も奇怪な夢を見る。そうこうしているうちに、大庭景親が源頼朝挙兵の報を伝えてくる。伊豆に流されている頼朝が八月十七日に挙兵した。しかし間もなく惨敗敗走した。頼朝についた三浦氏も畠山氏によって打ち負かされたという。これを聴いた清盛は激怒する。そもそも頼朝は死罪になるべきところ流罪で赦してやっていたのに、実に怪しからぬことであると述べ、頼朝を謀反人として糾弾する。その後、古来朝敵とされてき

た者たちの名が列挙される。これが「朝敵揃」である。二十五人の名が挙げられ、いずれも失敗したと結ばれる。そして、今の世は帝の権威が軽んじられているが、往古には帝の宣旨だと言うだけで草木鳥獸の類まで従ったという故事が語られる。

九 「勢揃」

五つ目の「揃物」である「勢揃」は、「朝敵揃」からかなり後に語られる。

平氏は頼朝を攻めるべく軍を起こすが、後白河法皇から頼朝宛てに「平家追討の院宣」が送られる。富士川の戦いで平氏は敗走する。義仲が拳兵し勢力を増していく中、清盛が没す。平氏は瞬く間に勢力を弱めていき、北陸で義仲に大敗を喫すると都を捨て、九州に移る。義仲は上洛を果たすが乱暴な振舞いのために人望を失っていく、西国で勢いを盛り返した平氏と戦って敗れる。一方鎌倉の頼朝は勢力を増し、源範頼と義経を差し向けて義仲を討つ。その間に平氏はますます勢いを取り戻し、一の谷に城郭を築く。これを討たんとする範頼と義経の軍勢の陣容が語られるのが「勢揃」ないし「三草揃」であり、七十余の人名が列挙される。

この「揃物」の後、一の谷の合戦が語られ、鴨越の逆落として勝敗が決し、平氏の主たる武将が十名も討ち死にする。この後、平氏は壮烈な滅亡に向かって進み、二度と挽回することはできなかった。

「大衆揃」において戦闘に逸る僧兵たちが紹介され、そして彼らの見事な戦いぶりへと滑らかに語りが進んだのと同じように、「勢揃」も意気盛んな源氏の武者たちの紹介から、その活躍、そして決定的勝利へと語りが進んでいく。この二つは、軍記物の中の「揃物」として、ある意味で非常に分かり易い。それに対して、他の三つの「揃物」はこのような定式には当てはまらない。これをどのように考えたらいいか。

その導きの糸は「朝敵揃」にあるように思われる。というのは、次に述べるように、この「朝敵揃」だけが、他の四つの「揃物」と異なる特徴を有しているからである。

十 「朝敵揃」の技法

平氏の最盛期を導くことになる安德天皇誕生までの経緯が語られた後、平氏の勢力に与る権力者たちが「公卿揃」で列挙され、平氏が益々勢力を伸ばす様子が語られた。以仁王の出自と境遇が語られ、彼の許を訪れた源頼政が拳兵の妥当性を説得する台詞の中で、味方するであろう者たちが「源氏揃」で語られ、頼政と以仁王は同心して拳兵の計画を進める経緯が語られた。頼政と以仁王の来訪に対し、どのように対応するべきか揺れ動いた三井寺の僧兵たちの様子が示された後、三井寺から出撃する僧兵たちが「大衆揃」で列挙され、それからすぐに彼らの奮戦ぶりが語られた。そして、源範頼と義経が二月四日に攻め寄せようとしたが仏事を尊んで戦鬪を控え、さらに五日、六日も日が悪く、ようやく七日に動くことができるようになった事情が語られた上で、二人の率いる将兵が「勢揃」で列挙され、その後迅速に戦場に向かう様子が語られた。

つまりこれら四つの「揃物」は、その前後で語られている者たちと、「揃物」が列挙している者たちが一致している。これらの「揃物」は、その時点で語り進められている登場人物たちに関し、具体的な情報によってはっきりとした輪郭を与え、「拾」の曲調はその輪郭を強調する機能を果たしている。

それに対し、「朝敵揃」は、論理的な筋からいえば列挙されている朝敵は清盛が頼朝に重ね合わせようとしている者たちだが、「朝敵揃」が語られる直前に語られているのは、清盛や平氏の側の者たちの動きである。つまり、「揃物」で表現される人物たちとその「揃物」が埋め込まれている出来事の主要人物が一致していない。こ

れが他の四つの「揃物」と異なるところである。

あくまでも語り物として考えるとき、このことはいささか不自然なことに思われる。読み物は、読み手が自分のペースで提示されている情報を追っていくことができるし、場合によっては前に戻って読み返すこともできる。だから、提示されている諸情報が複雑な関係にあっても、読み手が工夫すれば咀嚼し理解できる。しかし語り物は違う。情報が提示されてくるペースを聞き手が調整することはできない。語り手のペースに追っていくしかない。また、あえて語り手をさえぎって口演を止めさせ請求するのであれば、巻き戻して聴くことはできない。つまり、語り物は、聴衆にとっては、原則として不可逆的で、且つそのスピードをコントロールできない、情報群のフローである。

だから、「揃物」が列挙している者たちとその前後（とりわけその直前）で語られている者たちが一致していることが、聴衆にとって分かり易いことなのであって、突然それが変わったり、少し前で間接的に情報が与えられたりしている者たちと巻き戻して同期したりすることは、かなり負担がかかる、無理が大きいことのはずである。つまり、「公卿揃」、「源氏揃」、「大衆揃」、「勢揃」で列挙されている者たちが、その前後で語られている者たちと一致していることは、自然であり必要ですらあることだが、「朝敵揃」で列挙される者たちが、その直前で語られる者たちと重ならないのは、いささか奇妙なことに思われる。

だが、これを逆に考えてみてはどうだろうか。つまり、列挙される朝敵たちは、むしろ清盛に重ね合わせられているのではなからうか。換言すれば、聴衆たちは、清盛が激怒する様子を聞かされた後ですぐさま、古来よりの朝敵が「拾」の曲調で力強く列挙されていくのを聴かされることにより、むしろ清盛のほうを朝敵のイメージに重ね合わせていく仕組みになっているのではなからうか。もちろん、言葉の意味を追っていく上では、頼朝が朝敵たちに擬えられていることに変わりはない。しかし、音によって不可逆的に重ねられていくイ

メージの点では、清盛のほうが朝敵の色彩を帯びていく。

このような「語り」の仕掛けがあると考えると、いくつかのことに得心がいく。

清盛が怒りを爆発させる前の物語としては、清盛による福原遷都があった。それは「平家の悪行においては、きはまりぬ」と噂されるものであり、歴代の都が説明された後、いかに平安京からの遷都が罪深いことであるかが力説される長いくだりがあった。その後、清盛は夢見が悪く、物の怪に悩まされることになる。その後、清盛激怒の場面があり、続いて「朝敵揃」がある。この一連の流れから見ると、清盛こそが朝敵としての輪郭を与えられる人物として相応しい。

そして実際に清盛は朝敵であると言える。なぜなら、以仁王が源頼政の勧めにより平氏追討の令旨を出しているからである。ここで、前述したもう一つの不審な点が氷解する。現実には小規模な戦闘で惨敗したに過ぎない以仁王拳兵に先だち、なぜ戦いの場面に連結するわけでもない武将たちが延々と五十余名も「源氏揃」で列挙されねばならなかったのか、ということである。戦闘自体は見る影もなく、以仁王も呆気なく討たれてしまったが、以仁王の令旨は決定的な意味を有した。全国の反平氏勢力に大義名分を与え、清盛を朝敵にしたのである。歴史的事実としても、以仁王の令旨の影響力は大きかったらしく、『玉葉』によれば、以仁王の首実検が心許ないものだったこともあって、以仁王生存の風説が消えず、その後の動乱を誘った。一の谷敗戦後の宗盛が、平氏は以仁王のために滅びることになったのだという思いを漏らしたとする伝承もある。^{三三}全国規模の意義を有し、時代を変えることになった令旨だったので、徹底して協調する必要があったのである。

そして、この令旨によって清盛と平氏が（源氏の敵ではなく）朝敵になったことを明示するために、源氏ないしそれに連なる武士とは異なる勢力が起ったことを強調する必要もあった。だから、これまた実際には語られているほどの大勢力でも大合戦でもなかった僧兵たちの戦闘が、「大衆揃」を添えて強調される必要があっ

た。

しかしそれならば、なぜ「朝敵揃」と清盛をはつきりと一致させなかったのか。それは、清盛の許には正当な帝である安徳天皇がおり、三種の神器があったからである。清盛と平氏の側にも、大義名分を主張する正当な根拠がある。だから、清盛と平氏を朝敵として示すのは、暗示的に行うしかなかった。

それを可能にするのが、「語り物」としての平曲である。「読み物」としての『平家物語』では、言葉の意味通りのことしか、受け手に手渡すことができない。だが、不可逆的に声からの情報を重ね合わせていく「語り物」ならば、言葉通りの意味とは別に、ないしそれと並行して、激怒する清盛の像にさまざま重ね合わせるように、聴き手の脳裏において清盛に朝敵のイメージの強い影を差し掛けることができる。

十一 おわりに ～「揃物」から見る平曲～

改めて最初から「揃物」を軸に全体を整理してみよう。

安徳天皇誕生により平氏の権勢が確立し最高潮に達したところで、「公卿揃」が示され、平氏の権勢に連なる人々が、つまり平氏の勢力の概要が示される。「公卿揃」という呼称とその内容は示唆的である。武門として台頭してきたはずの平氏の陣営は武門によって表現されるのではなく、貴顕の貴族たちによって表現されているからである。列挙されるのは三十余人。

これに対抗する陣営として、巨大な武門全体が「源氏揃」で起ち上がることになるが、それを起ち上がらせしめたのは、皇子の令旨である。これにより平氏と清盛は朝敵になった。列挙されるのは五十余人。

単に源氏の敵ではなく、朝敵であるが故に、源氏以外の陣営も起ち上がることになる。それを明瞭に示すの

が三井寺僧兵の決起であり、「大衆揃」によって強調される。列挙されるのは五十弱。

しかし平氏と清盛は安徳天皇を押さえており、それもまた正当な大義名分であるので、直截に朝敵であるとは言えない。故にその悪行が極まる福原遷都の様子と、それがいかに甚だしい悪行であるかについて言葉が尽くされた後で、「朝敵揃」を通して清盛に朝敵のイメージが暗示的に付与される。列挙されるのは二十五人。その処理が行われてから、頼朝側の詳しい事情の描写が始まり、後白河法皇から「平家追討の院宣」が渡され、益々平氏と清盛の朝敵としてのイメージは色濃くなっていく。ここから平氏の没落の様子が加速していくことになる。

それでもなお、力の天秤は容易には片方に傾かない。この状況を決定的に不可逆的に変える戦いを行うことになる将兵が「勢揃」で列挙される。列挙されるのは七十余人。

いずれの「揃物」も物語の根本的な設定や決定的なターニングポイントを示唆するものになっているが、やはり物語全体の結論に直結する「勢揃」が、数の上でも他を圧倒して最も豪華な「揃物」になっている。

また、このように全体を整理してみると、個々の戦いの描写において、両陣営について釣り合いがとれるような「揃物」がセットになっていないことも理解できる。おそらく平曲が語っているのは、様々な合戦の集合体ではなく、大きな一つの合戦である。その合戦の性格に、要所要所で鮮明な輪郭を与えているのが、五つの「揃物」である。

あるいは正反対から理解してもよい。平曲が語っているのは、膨大且つ多様な合戦や愛憎劇の集積体である。だからこそ、それらの整序のため、五つの「揃物」が「拾」の曲調で高らかに屹立しているのである。^三

注

- 一 拙稿『神話から見た古代東地中海沿岸の文化交流』、高志書院、二〇〇五年二月、九五～一五六頁（特に九五～九六頁）。
- 二 河野与一訳、『プルターク英雄伝（二）』、岩波書店、一九七七年、一七頁。
- 三 松平千秋訳、『ホメロスとヘーシオドスの歌競べ』、同訳『ヘーシオドス 仕事と日』、岩波書店、一九八六年、一〇七～一四四頁（本文）、一七一～一七六頁（注）、一九〇～二〇〇頁（解説）。
- 四 松平千秋、『ヘーシオドスの文体』、同著『ホメロスとヘロドトス』、筑摩書房、一九八五年、四三～五四頁（特に四七～四八頁）。
- 五 『イーリアス』第二書四九四～七七九行。『イーリアス』について用いたテキストはOCT版（D. Monro & T. Allen, *Homeri Opera I*, Oxford UP, 3rd ed., 1920. D. Monro & T. Allen, *Homeri Opera II*, Oxford UP, 3rd ed., 1920.）¹。また、本稿で用いた日本語訳は基本的に呉訳を参照している（呉茂一訳、『イーリアス 上』、岩波書店、一九五三年。同訳『イーリアス 中』、岩波書店、一九五六年。同訳、『イーリアス 下』、岩波書店、一九五八年。）
- 六 『イーリアス』第二書八一六～八七七行。
- 七 『イーリアス』第三書一六一～二四二行。
- 八 『イーリアス』第八書二七三～二七七行。
- 九 『イーリアス』第二二書二〇～二四行。
- 一〇 『イーリアス』第一六書一七三～一九七行。
- 一一 高木市之助、『軍記—文藝の口誦性について』、同著『古文藝の論』、岩波書店、一九五二年、一〇八頁。
- 一二 本稿において『平家物語』のテキストは、百二十区句本を底本とする新潮日本古典集成を用いる。水原一校注、『平家物語 上』、新潮社、一九七九年。同校注、『平家物語 中』、新潮社、一九八〇年。同校注、『平家物語 下』、新潮社、一九八一年。
- 一三 第三十四句「競」

- 一四 第三十六句「三井寺大衆揃」
- 一五 第三十七句「橋合戦」
- 一六 第三十八句「頼政最後」
- 一七 『玉葉』五月二十六日の条と平曲該当部分との関係の分析については、富倉徳次郎、『平家物語全注釈 上巻』巻、角川書店、一九六六年、六一〇頁による。
- 一八 『山槐記』五月二十六日の条と平曲該当部分との関係の分析については、富倉前掲書、六二一頁による。
- 一九 富倉前掲書、五九八頁。
- 二〇 富倉、前掲書、五五六頁。
- 二一 第四十一句「都遷し」
- 二二 水原、『平家物語 上』、三五八―三五九頁、注参照。
- 二三 平曲の全体の中での「朝敵揃」の位置づけを論じた先行研究としては、兵藤氏の業績などがある。兵藤裕己、「王権の時空と反世界―平家物語論」、同著、『王権と物語』、青弓社、一九八九年、六五―九九頁（特に八二―八五頁）。同、「平家物語の〈語り〉の構造―発生論的に―」、同著、『語り物序説―「平家」語りの発生と表現―』、有精堂、一九八五年、五一―七四頁（特に五一―五四頁）。但し、氏が注目する観点は、平家物語において、「一人として素懐をとぐる者なし」とされる「朝敵をほろぼさんとする輩」の系譜に源頼朝が位置付けられていることであり、氏が説こうとするのは、「朝敵」必滅の「王権因果論」が、平家物語において新しい段階に入った、ないし相対化された、ということである。他方、本稿で筆者が注目しているのは、平曲において揃物が果たしている機能であり、論点が異なる。そして、そのような機能に注目しつつ「朝敵揃」以外の揃物も含めて考えていくと、平曲の作者が（いわばメタテクストのレベルで）聴衆に伝えている含みとしては、「朝敵」の系譜に連ねられているのはむしろ清盛だと考えることができ、兵藤氏とは異なる方向から物語を読み解くことができるのである。